

# 野球で生きる日々 に感謝

## 刻む記憶

東日本大震災10年

2011年3月11日午後。東日本大震災の最初の揺れが始まったその時、選抜高校野球大会出場が決まっていた光星学院高(現八戸学院光星高)ナインら約40人は、関東上空の飛行機内にいた。キャンプ地から学校に戻る途中だったが、結局は帰校できないまま、大会出場を余儀なくされた。「本来は野球どころではないのでは」。仲井宗基監督(50)、小坂貫志部長(44)はそんな葛藤と戦いながら本番に挑んだ。あの時の苦い経験を胸に、今も指導を続けている。(林泰輔)



震災当時、監督に就任して初の甲子園に臨んだ八戸学院光星高の仲井宗基監督(左)と小坂貫志部長(右)2月25日、八戸学院屋内練習場

### 震災時にセンバツ出場 光星高(八戸)

## 「当たり前じゃない、だから全力で」

「多くの人が苦しんでいるのに、自分らは野球をしていていいのよ」(仲井監督)。シレンマはあったが、学校側の後押しもあり出場を決断した。

本番で、仲井監督はナインを「野球ができることに感謝し、精いっぱい力を出し切ろう」と鼓舞し続けた。1回戦で水城(茨城)に快勝し、2回戦で智弁和歌山に惜敗。チーム悲願のセンバツ1勝を果たした大会だったが、仲井監督は「試合内容もほぼ覚えていないけど、自分自身、最後まで動揺していた」と当時を振り返る。

大会を終えて帰郷し、惨状を目の当たりにしたナインたちは、近隣の避難所に救助物資を配る活動などにも取り組んだ。「実家は信じ難い状況だった。魚をさばく機械、買ったばかりの車も駄目になった」と小坂部長。

一部からは沖縄遠征や大会出場などに対する批判、中傷も受けたが、全てを甘んじて受け入れ、地域に愛されるチームづくりに努めた。その後、の躍進は周知の通り。甲子園では11年夏、12年夏に3季連続準優勝、14年夏、19年夏は8強入りと、東北屈指の強豪員としての地位を築いた。

仲井監督らは震災を教訓に、部員にはこう説いている。「野球ができることは決して当たり前じゃない。だからこそ、日々主力で取り組むんだ」。

仲井監督は震災を教訓に、部員にはこう説いている。「野球ができることは決して当たり前じゃない。だからこそ、日々主力で取り組むんだ」。